

華嚴家における如来蔵義

水 谷 幸 正

(一)

私は如来蔵思想の思想史的展開に関して強い関心を持っており、宝性論、勝鬘經、涅槃經、仏性論、楞伽經などを中心とするインドにおける如来蔵思想については、それぞれ個々の問題を取上げつつ、従来幾度びか発表してきた。ところがそれにはシナ仏教々々学における如来蔵の理解、そしてその思想史的展開を無視することは出来ず、インド、シナの両者はそれぞれ独自の思想領域を有して展開しているとはいえ、インド仏教よりの受容を考えずしては、シナ仏教を語ることが出来ないし、またシナ仏教における理解の仕方を通さずしては、インド仏教を知ることが出来ない。したがって両者相俟つて共に究明することによつてはじめて如来蔵思想の適確な跡づけをすることが出来るのである。

こういう意味からして、数年前、地論宗南道派の巨匠ともいうべき淨影寺慧遠の「大乘義章における仏性義」を発表したのであるが、更にここではそれに引き続いて「華嚴家における如来蔵義」について、思想史上の問題点を明きらかにしたいと思う。ここにいる華嚴家とは、主として賢首大師法蔵を指すのであつて、「法蔵教学における如来蔵義」と言い換えてもよい

であろう。

(二)

そもそもインドにおける如来蔵思想を直接に受けついで、その教義を掘り下げていったシナにおける学派としては、涅槃、地論、摂論の三学派をあげることが出来る。そしてこの三学派のうち、摂論学派はその思想的立場が、如来蔵思想によつて大きく影響されているというだけで、立場そのものは、あくまで三性論、アラヤ識説による唯識思想であるから、克実すれば涅槃と地論の二学派といえよう。

ところで華嚴の法蔵は既に知られている如く、新訳唯識仏教に対して、性相融会という旗印のもとに、地論派の流れも承けつつ、旧訳唯識である摂論派の学説をとり入れて、更に一步進んだ縁起思想を展開したのである。それがすなわち如来蔵縁起思想と呼ばれるものにほかない。

したがつて、さきの涅槃と地論の二学派のうち、地論はその如来蔵義が華嚴へと吸叫され展開していったとするならば、涅槃と華嚴の二学派ということが出来るし、その涅槃学派も天台に帰入していったとするならば、結局のところ、天台と華嚴というシナ大乘仏教の双壁に落着くのである。すなわちつぎのように図示することが出来る。



そして地論、華嚴系統を如来蔵縁起思想、涅槃、天台系統を如来蔵仏性思想として両者をはつきりと区別すべきである。如来蔵縁起思想は、アラヤ識思想との交流による形成であつて、楞伽經、大乘起信論という直接の背景があり、如来蔵仏性思想は、いわば仏性としての如来蔵の論理をしめすもので、涅槃經、如来蔵經、宝性論などの經論を、インド如来蔵思想より直接せしめることが出来よう。しかも、この涅槃、地論、両者の橋渡しをするものとして、すなわち、仏性思想と縁起思想とをつなぐものとして、「如来蔵によるが故に生死あり、如来蔵によるが故に涅槃あり」という如来蔵依持説を説く勝鬘經を無視することが出来ない。この經が五世紀前半にシナに翻伝されるや、数十年を出ずして、法慧の義疏をはじめとして続々として末疏があらわされているところより、若しそれらを一括して勝鬘学派という名前で呼び、その存在を認めることが出来るとするならば、この学派は如来蔵仏性思想より如来蔵縁起思想への重要なモメントとして見逃すことは出来ない。

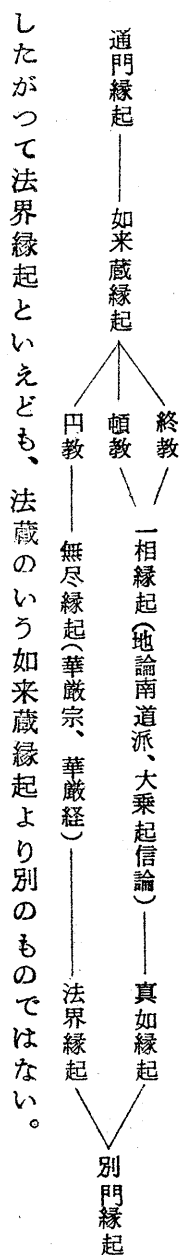
(三)

シナ仏教における如来蔵思想の系譜のあらましは大体上述したようなものであるが、その頂点に立つものが法蔵の如来蔵縁起思想である。頂点であるからには、その背後にある地論、撰論、涅槃などの諸思想の展開を明確にせずしては、法蔵の如来蔵義を把握することは困難であるが、シナ如来蔵思想における系譜からいつて、その系譜の概観を頭に入れつつ、結論的に法蔵の如来蔵義を究明することは、思想史構成の早道にもなるであろうから、簡単にその問題点を一二考察してみたい。

そもそも「如来蔵縁起」なる言葉を使いはじめたのは法蔵にほかならない。それ以前は、仏性としての如来蔵にしろ、染淨の依持になる如来蔵にしろ、アラヤ識縁起の真如面としての如来蔵にしろ、その論理が如何に鋭く、いかに組織立つて整然としていても、「如来蔵縁起」という思想としての一つの自覚はなかった。一般に法蔵は華嚴宗の大成者といわれているが、実質的には華嚴宗の創始者であり、如来蔵縁起宗の大成者であつたといえよう。すなわち、法蔵自身が五教十宗判とは別に随他意門の教判として、華嚴宗以外の教えを四つに大別するうち、その最後の才四如来蔵縁起宗は、実は彼自身によつて大成されたのであり、また彼によつてピリオドを打たれたといつてもよいであらう。この点が法蔵の如来蔵義において先ず才一に注目すべきこととがらである。

このことは「縁起」に対する彼の見解において詳しく伺うことが出来る。縁起に通別二門を分け、通門の縁起とは五教判の中の、終、頓、円の三教に通ずる縁起で、それが如来蔵縁起にほかならず、別門の縁起とは、その如来蔵縁起の上に、一相と無尽の二つに分け、一相縁起は真如を本源として、三細六塵というように因縁和合して現われる、染淨薰習の縁起を指し、無尽縁起は、諸法が現起して、相即相入しているありのままを指すのである。そして前者を真如縁起と呼び、後者を法界縁起と呼ぶのである。すなわち、如来蔵縁起のうち、地論南道派のよく依用した、大乘起信論にもとづく、真如隨縁による縁起を説く終頓二教を真如縁起、華嚴經の本旨であり、法蔵自身の最後の目的である重々無尽、事々無碍法界の性起の法門たる円教を法界縁起というのである。

これを図示すればつぎのようになる。



(四)

次に、法蔵の如来藏義として注目すべき才二のことがらは、上述したことよりしても、明きらかなように、如来藏とは真如そのものであり、一心法界そのものであるということである。これは元来、如来藏が無垢真如である法身に対応する、在纏位の有垢真如であるという、宝性論などの如来藏義の原型的な基礎構造と趣きを異にするものといえる。如来藏は決して如来そのものではなく、如来の因であり、したがつて、法身、真如そのものではなく、衆生界に法身が遍満し、真如が無差別である辺を名づけて如来藏というのである。これは恰も起信論を通じて得た法蔵のいう「アリヤ識」の概念とよく似ている。法蔵によれば、アリヤ識とは、不生不滅の真如である如来藏より随縁したものであり、したがつて、如来藏と不一不異なる無没識であるとする。これは宝性論などで、如来藏は法身と不一不異であるというのと、全く趣きを同じくするものといえよう。

このような理解は、アラヤ識を真淨識、真識心とみなして、如来藏とアラヤ識を同一視する地論宗南道派の教義、また、真如随縁不守自性としてアリヤ識を真妄和合識とする撰論学派、更に、アマラ識として才九無垢識を立てる一派、更にまた、このようなアラヤ識による種子縁

起は全く説かないのにもかかわらず、真如随縁のアリヤ識を説く起信論の教義、これらを綜合し、統一しようとする法蔵の意図が、そのまま彼の如来蔵に対する理解となつたものと考えられる。しかも、それは内面的には、法蔵が最も重んじていた起信論では、真如、如来蔵、アリヤ識の概念がいかにようにも受けとれる幅をもつていたこと、対外的には、当面の論敵であつた新訳法相唯識をも、綜合せんがための理論であつたこと、などが当然かえりみられてくるのである。

(五)

要するに、いわば何らアラヤ識と関係のなかつた如来蔵思想は、如来蔵依持の面より縁起へと理解が進んで、アラヤ思想に交流し、如来蔵の問題というよりは、むしろアラヤ識の思想領域内で問題を展開せしめて、六世紀より七世紀にかけてシナ仏教々々の華を咲かせたのであるが、いきつくところにいきついたのが、真如縁起、法界縁起を内包するものとしての法蔵の如来蔵縁起という論理であり、それにもとづいて、華嚴家の説く、如来蔵、あるいはアラヤ識の独自の概念が出て来るのである。法蔵は大乗密厳経疏に、如来蔵たる真心に依持と縁起の二門があることを説いて、「縁起の真心を説いてラヤと名づけ、依持の真心を説いてアマラと名づく」といつているのは、彼の立場における、そしてまた意図せんとしたところの如来蔵義を微妙に現わしているといえよう。

如来蔵仏性思想を才一の立場、如来蔵とアラヤ識の交流による種々の思想を才二の立場とするならば、如来蔵縁起という才三の立場を打ち出したのが法蔵の如来蔵義のよりどころである。

以上、簡単であるが、問題点を一二紹介してシナにおける如来藏思想形成の一点を与えておきたい。(仏教大学昭和三十三年度秋季学会研究発表要旨)

以
上